

## 第2章 ライフストーリーのウェブ公開

横家 純一

### 1. はじめに

これまでわれわれは、紙媒体による編集・製本という作業により、ライフストーリーの作品を発表してきたため、こんかいの電子媒体によるウェブ公開という、まったく新しい企画の遂行においては、多くの困難に直面した。ここでは、これまでの作業をふりかえりつつ、その問題点のいくつかを紹介したい。

関係者の尽力のおかげで、表1、表2のように、3年間で、合計43点のライフストーリー作品を収集し、ウェブ公開することができた。その内訳は、「語られたストーリー」13点と、「自分史的エッセイ」30点である。

前者の「語られたストーリー」は、聞き手の要請をうけて語られたものを、主に編集者が編集したもので、そのうち8点は、男性の語り手によるものである。インタビュー調査の記録であることから、自分史的エッセイよりも、あきらかに、実現しにくい。それは、語り手との共同作業が前提となり、相手の都合（ここには、意欲や話好きかどうかということも含まれる）が絡むからである。しかし、いったんそのハードルをのりこえると、他者との相互作用の醍醐味がえられる、ということでもある。

後者の「自分史的エッセイ」は、まず筆者によって書かれ、筆者または編集者によって編集されたもので、全員、女性によるものである。これだけの作品が集まったのは、ひとえに、授業での課題としたからにほかならない。ウェブページでの公開だからといって、ひろく一般からの投稿をつのることは、容易ではない。

公開	語られたストーリー(語り手・男)	自分史的エッセイ	計
第一期 2011年	6 (3)	8	14
第二期 2012年	4 (3)	6	10
第三期 2013年	3 (2)	16	19
計	13 (8)	30	43

表 2:ウェブ公開作品の全タイトル

	種類	タイトル	語り手 ／筆者	取材／ 執筆年
第一期	語られたストーリー	12歳で敗戦を迎えて	男性、74歳	2006
		どん底の中で「奇跡体験」をして	男性、74歳	2006
		そろそろ、お嫁にいこうかな	女性、40歳	2007
		江戸っ子の「戦争体験」	女性、78歳	2007
		ブロッコリーってゆでるの？	女性、21歳	2009
		男性養護教諭のパイオニアとして生きる	男性、62歳	2010
	自分史的エッセイ	「ただいま、おばあちゃん」	女性、22歳	2009
		褒めてもらえなかった私	女性、22歳	2009
		やっと見つけた葛藤から抜け出すヒント	女性、21歳	2009
		就活戦士ハルカ	女性、22歳	2010
		ちょっと変わった家族	女性、22歳	2010
		青春の左腕の「傷あと」	女性、21歳	2010
		もう「元ヤン」と言わせない	女性、21歳	2010
	両親から受け継いだ大切なもの	女性、20歳	2010	
第二期	語られたストーリー	老年期の過ごし方を考え続ける元牧師	男性、86歳	2009
		こんなことでは死なない	女性、76歳	2010
		いくつになっても未熟者	男性、47歳	2010
		寝屋子と寝屋親を体験した漁師のはなし	男性、63歳	2010
	自分史的エッセイ	ハルカ第2章 一オーラ奪回作戦一	女性、21歳	2011
		何か温かいもの	女性、23歳	2011
		受験の価値観で生きて	女性、21歳	2011
		自分の進む道	女性、22歳	2011
		女子高文化一キラキラした彼女たちの中で	女性、23歳	2011
		神様からのギフト	女性、22歳	2012
		第三期	語られたストーリー	見えてきた自分の役割
見えてきた自分の挑戦	男性、55歳			2012
ばあちゃん、ゆるいなあー	女性、80歳			2012
自分史的エッセイ	「お母さんを守ってあげてね」と言われて		女性、22歳	2004
	ハルカ第3章一母と娘と子と一		女性、24歳	2012
	「趣味」との出会いは「人」との出会い		女性、21歳	2012

	母と私の間の矛盾	女性、21 歳	2012
	これまでと、これからの私	女性、21 歳	2012
	頑張っていた私と、頑張れていない私	女性、21 歳	2012
	痴漢事件	女性、22 歳	2012
	感謝の気持ちを見つけるまで	女性、20 歳	2012
	自分らしく生きていく	女性、22 歳	2012
	「今までお嫁さんになるために勉強してきたの？」	女性、22 歳	2012
	私がこの道を目指したわけ	女性 19 歳	2012
	アルバイトを通して私が得たもの	女性、20 歳	2012
	「大人」な自分のライフストーリー	女性、21 歳	2012
	家族からの卒業と自分の道を歩くこと	女性、20 歳	2012
	私と姉の、姉妹の形	女性、21 歳	2012
	意外にも波瀾万丈だった私の 21 年を振り返って	女性、21 歳	2012

## 1. ウェブページの構成

電子ファイルとして提出された原稿は、数回以上の校正——なかには、幸運にも筆者や語り手自身による校正が可能だったものもある——を経て、作品となる。こんかいは、読みやすいタテ書きの PDF ファイルと、ケータイなどの端末ユーザーのための HTML ファイルの二種類を用意した。ただ、この“サービス”が奏功したのかについての確認はしていない。

構成で工夫したことといえば、第一画面で、各ストーリーのテーマを象徴する「タイトル」、および、読者をひきつけるための「リード」(表 3)を配し、読者がすばやく目的の作品にたどり着けるようにしたことである。また、それぞれの作品の冒頭には、「あらまし」(表 4)をおき、作品内容の、いわば〈予告編〉を提供することで、読みこみの動機づけを行った。

さらに、長い作品を 2 回のシリーズ物にし、読みやすさとウェブの動きを追求するといった工夫もしてみた。たとえば、第一期の「12 歳で敗戦を迎えて」と「どん底の中で「奇跡体験」をして」は、一つの「語られたストーリー」を二つに分けたものであり、「就活戦士ハルカ」(第一期)と「ハルカ第 2 章—オーラ奪回作戦—」(第二期)は、一つの「自分史的エッセイ」を二つに分けたものである。いずれも、結果的にどうだったかという検証はできていない。

いまふり返ってみると、「リード」はともかく、「あらまし」の作成は、本文の校正作業と重なり、時間的にどちらを優先するかという問題をかかえることになった。その結果、第三期では、「あ

らまし」をつけないものが多くなったが、これも、やむをえない選択だった。

表 3:「リード」の例	
2011.02.18	<u>ブロッコリーってゆでるの？</u> 語り手（女性 21 歳 2009 年取材）
すぐそばにいる友だち。なんでも知っているはずの友だち。そんな友だちに、かるーい気持ちでインタビュー。しかし、20 歳で母になったその友だちは、意外な告白をした。	
→本文 ( HTML )      →本文 ( PDF 縦書き )	

表4:「あらまし」の例

<p>【タイトル】 ブロッコリーってゆでるの？</p> <p>【あらまし】 聞き手の中村愛加(仮名、21歳)は、「赤ちゃんできて結婚する」と突然連絡してきた友人、斉藤直美(仮名、21歳)の人生に興味をもち、聞き取りに出かけた。わがままだけど、みんなから愛され、いつも天使のような直美だったが、20歳という若さで妊娠し、結婚して、妻になり、そして、母になった。そんな直美には、友だちにも言えない秘密があった。</p>
---

こまかいことだが、英数字の処理は、容易ではない。たとえば本稿のように、ファイルすべてがヨコ書きであれば半角のままでもいいが、タテ書きの場合は読みにくい。タテ書きのみの場合を考えたとしても、漢数字にするのか全角のアラビア数字にするのかといった判断は、いまだに、決着がついていない。

ここで技術的な問題として一つ報告しておきたいことは、こんかいのように、一つの下稿を PDF と HTML の二種類のファイルとして共有したとき、変換のさい、バグが発生する危険があるということである。たとえば、ルビ付きのワード文書を HTML ファイルに変換すると、いうまでもなく、ウェブ上の文章は、ぐちゃぐちゃになる。これを避けるためにわれわれは、やや見ばえは落ちるが、〇〇(△△)といった形で、〇〇の漢字のあとに、△△のルビをカッコつきで表現した。

漢字変換については、たとえば、「出来る」は「できる」に、「事」は「こと」にすることで、読みやすさを追求したが、「時」「頃」「今」「行く」「来る」「言う」「見る」などの場合は、一貫性の追求はあきらめざるをえなかった。あるときは漢字で、またあるときは、ひらがなとなった。かといって、それがデタラメかというともうそうでもなく、漢字が続くときは、ひらがなに変えるといった、作品の読みやすさを追究した結果といいたい。

## 2. プロの編集

ホームページの運営一般にいえることだが、より多くの読者を獲得するためには、ウェブ・ページが「動いている」ことを印象づける必要がある。そのためにわれわれには、精力的な編集が求められたにもかかわらず、年一回のウェブ公開、つまり「アップ」が限界であったことである。とはいえ、第一期は、プロの編集者の力を借り、文章表現を洗練させ、作品の完成度を高める工夫を試みた。たとえば、第一期作品の校正例を一つ紹介しよう。

プロの編集者が手を入れたところを、ゴシック体にしてみた。ここでは、3点のみ指摘しよう。まず、タイトルを『元ヤン』の私から、「もう『元ヤン』と言わせない」と変えたこと。「元ヤン」という強烈な言葉を生かしつつ、名詞で終わっている弱点を克服する仕掛けを用意している。静態的な前者にたいして、後者は、読者に向かって叫び、訴えている動的な感じがする。あきらかに、その効果は、絶大である。

編集前の文章
「元ヤン」の私 (タイトル) 家族の風景 (小見出し) 「俺の稼いだ金を俺の好きに使って何が悪い！」 聞きなれた怒声が、家中に響き渡る。 「それが親の言葉?! 何考えてるのよ！」 ああ、また始まった。もっと幸せな家庭に生まれたかった。怒声が響き、物が壊れる音がすると、私はひしひしとそう思っていた。もっと明るい、「還る場所」に相応する家庭に生まれたかった。 私の家はごく一般的な家庭かと問われたら、たぶん「否」の部類に入るだろう。父は酒も煙草も賭博もしない。外面がやけに良くて、傍から見たら「良いお父さん」だと思う。母もそれに騙された一人。

編集後の文章
もう「元ヤン」と言わせない (新タイトル) 父が相談なしに大借金 (新小見出し) 「俺の稼いだ金を俺の好きに使って何が悪い！」 聞きなれた怒声が、家中に響き渡る。 「それが親の言葉か! 何考えてるのよ」 ああ、また始まった。もっと幸せな家庭に生まれたかった。怒声が響き、物が壊れる音

がすると、私はひしひしとそう思った。もっと明るい、「帰る場所」にふさわしい家庭に生まれたかった。

私の家はごく一般的な家庭かと問われたら、たぶん「否」の部類に入るだろう。父は酒もタバコも賭け事もしない。外面<sup>そとづら</sup>がやけに良くて、はたから見たら「良いお父さん」だと思う。母もそれに騙された一人。

つぎに、「家族の風景」を「父が相談なしに大借金」という小見出しに変えたのはなぜか。あきらかに、前者が、どこにでもある一般的な事象の説明となっているのにたいして、後者は、これから始まるストーリーの前説<sup>まえせつ</sup>——読者を話の内容に惹きこむ仕掛け——として、きわめてインパクトのあるものになっている。さすが、プロの目のつけどころ、と言ってしまえばそれまでだが、おそらく、そのような選択ができたのは、『元ヤン』の私という文章を何回も、何回も読みこんで、その筆者の叫び声をきき、それに共振することができているからにほかならない。

もう一つは、煙草を「タバコ」とし、外面に「そとづら」とルビをふっている点である。いきなり、タバコとくれば、漢字の読みにわずらわされることはないし、ともすると「ガイメン」という、意味をなさない音が出てきそうな漢字にたいして、ソトヅラと援護することで、文意をよりはやく正確に伝えることに成功している。そればかりか、そのような表音のカタカナ語は、読者に、筆者が自分のストーリーを創作するために、頭の中で発話したときの〈息遣い〉までを運んでいる。

### 3. 編集の理念

自分史的エッセイにせよ、語られたストーリーにせよ、ストーリーである以上、曖昧な部分は残る。その多義性をそのまま残せば、読者に敬遠されたり誤解されたりするおそれがある。それを避けるために、あえて、編集者の判断で、できるだけ一義的に洗練させることにした。

そんなことはできるはずはないとか、そんなことはしてはいけない——というヴァレリー・ヤウ<sup>(1)</sup>のような反論も聞こえてきそうだが、ここには、せめてなんとか、こんな生き方をしている人がいる、ということを知ってもらいたいという〈祈り〉がある。それが、「越権行為」であるかという議論は、別の機会にゆずりたい。

ただし、自分史的エッセイは、書かれたものであり、編集者といえども、安易に修正することは許されない。どうしても、書き手にさし返すことができないものは、たとえ、文章表現が乱れて

いても、慎重に取り扱った<sup>2)</sup>。このことは、自分史的エッセイを、いったん、語られたストーリーと同じ水準で、つまり、文章の一義性を重んじた——これをかりに、「第一水準」とする——校正をしていくうちに、「なにか違う」という感じたことからヒントをえた。そのため、さいど原文にさし戻し、こんどはややゆるい、いわば「第二水準」で校正することで、結果的に、エッセイ表現のもつ、〈ゆれ〉を包摂する独自の世界に光をあてることになった。つまりそれは、相手がいる前で語られたものは、もはや、取り消しや訂正はできないが、書くために自分の頭の中で反すうしているうちは、何度でも修正がきくという、自由な世界なのだ。

その過程で一つのおもしろい発見があった。ある 6600 字ほどの作品に、「わたし」という表現が頻繁に出てくるので、数えてみたところ、なんと 72 回もの「わたし」が使われていたのである。このこと自体は、別の視点から考察することができるはずだ。ここでは、「私」という漢字で統一することで、語り手にとって特別に大切な自分というものを強調してみた。もちろん、「わたし」というひらがな書きの方が、自分の強調になる、と考えることもできようが。

## 注

- (1) ライフストーリー・インタビューの記録を、歴史的な情報とみなすヴァレリー・ヤウは、トランスクリプトの作成について、「意味があると思われるものはすべてそのままにする」(『オーラルヒストリーの理論と実践』、インターブックス、2011:385)と主張している。
- (2) とりわけ、第三期の編集では、それまでと比べて、たとえ平凡なタイトルであっても、筆者のあつい思いがこもっているものには、あまり手を加えない方針をとった。その結果、書かれている内容の核となる部分を象徴しない、ややもの足りないタイトルになっているケースもある。学期途中であれば、この点について、筆者との対話や相談も可能なのだが。